

大野晋氏著「日本語の起源」(岩波新書、一九五七年)

を読む

村山七郎

大野晋さんの「日本語の起源」は、特に安田徳太郎さんの「万葉集の謎」(一九五五年)が出てから日本民族及びその言語の起源に対して深い関心をよせている広い知識人層の多大の注目を集めており、それには劣るが言語学・国語学の方面で研究に従事する人々の注目をもひいている。このアンビシャスな労作の中で大野さんはどのような説をたてたのかを検討し、それについての私の考えをのべて見たい。

まず大野さんの方法について一言。これまでの学者が、もっぱら言語の領域にとどまって日本語の系統を論じてきた(この点、歴史家白鳥庫吉の「日本語の系統」(一九五〇年)も例外をなさない)のに対し、大野さんは、人類学・民族学・考古学的な資料も利用して、日本人の生成の問題を明らかにしながら、それと関連させて日本語の起源を究明しようとする。「……ヒトの学問、つまり人類学や、文化史の学問、つまり考古学や、更に広く民族学といった、関係の深い学問と共同して、日本語や日本人の起源と成立を考えていくというのも、たいせつな一つの立場だと思ふ」(六頁)と述べられている。恐らくこの広い立場に対して反対す

るものはないであろう。それ自体として、この立場は正しいと言えよう。たゞ日本語及び日本人の起源の問題を解決するために、人類学・民族学・考古学等々の専門家の研究成果が大野さんによってどの程度まで正当に摂取、評価されたかは問題であろう。日本人類学会・日本民族学協会第十二回連合大会(十月二十五日、福岡)で日本語の起源の問題と関連して発言された鈴木尚(人類学)・水野清一(考古学)・岡正雄(民族学)・古畑種基(法医学、血液型)諸教授の説を拝聴して、私はこの疑問をいだかざるを得なかった。

日本語の起源の問題を究明しようとするとき、言語学者が言語学以外の関連諸科学の成果を考慮することは、右述の通り、それ自体として正しいことは疑われないが、一人の学者でこれら凡てに通ずることは不可能に近く、そのため、これまでの学者は日本語の系統・起源の問題について、言語事象の研究の範囲にとどまろうとした。それと同時に、次の事情がこれを促した。それは、ある言語の系統問題は、言語的事実によってのみ最終的に解決されることを言語学者が明確に意識していることである。印欧系諸

語の系統関係は、もっぱら言語的事実の精密な分析によって明らかにされた。また例えばフィン・ウゴル系諸語のように、古い記録が比較的少ない言語の系統問題も、もっぱら言語学的方法によって輝やかしく解明されている。サモエード語はフィン・ウゴル諸語とともにウラル語族を形成することが、サモエード人(約二

万一千人)の血液型や指紋型を少しも調べずに、彼らの先祖が使用した土器を調べずに、彼らの経済生活の特徴を分析せずに、単に彼らの言語の分析から決定され得たのである。人類学的・考古学的な事象は、結局、所与言語の系統・起源の問題の解決に対して、決定的な発言はできない。言語系統問題の決定は、くり返して言うが、言語的事実によってのみ行われる。これは根本的なことであって、比較言語研究にたずさわる人の忘れてならないことである。

だから「言語は誰かが話すものであり、その誰かは、かならず何かを作り、食ひ、生活をいとなんでいたのだから、そうしたこととの複合体としての人間生活をとらえなければ、日本語の起源というような問題は解決されない」(六頁)という大野さんの立場には、にわかには賛成しかねる。この立場が災しているのではないかとさえ思われるふしがある。後に見るように、日本語代名詞コレ・ソレ・アレの区別をモン・クメール語などと結びつけるのは稲作文化の伝来などを考えているためであろうと思われる。また朝鮮語を後述のように稲作文化民族の言語とツングースの言語との接触から生れた言語と見ているらしいことも、言語的事実の分析によって到達された結論ではないようである。精密な言語分析が重んじられていない傾向が見えるのは、大野さんの右のような

立場と関係がありそうに見える。

大野さんの日本語系統・起源観は次のようである。

今から六千年前から始まる縄文式文化時代に、西日本には現在のポリネシア語に似た言語を話していた南方系種族が住んでいた。ところが今から約二千年前に彌生式文化をもってアルタイ系言語を話す朝鮮南部の人間が日本にやって来た。後者は少数であったが、文化的に土着南方系種族を圧倒し、アルタイ的朝鮮南部の言語が勝利した。しかし音韻の諸特徴と身体部分名詞に南方語が保存された。要するに、日本語はポリネシアの音韻特徴と身体部分名詞をもつ朝鮮語である。成立の時期は朝鮮人渡来の時、即ち今から二千年前と、魏志倭人伝(そこに出てくる日本語資料から見ても、その時までに日本語が確立していたと見られる)の現われる三世紀との間である。

それでは、縄文式文化時代の西日本住民がポリネシアの言語を話していたことはどうして推定されるか。

「ハワイからニュージーランドに広がっているポリネシア語の一群……この言語の音韻の特徴が、日本語の音韻の特徴と、実によく合致する。ポリネシア語の母音は a・i・u・e・o の五つ。uo・ui などの二重母音は全然許容しない。すべての音節が sa とか、to とかのように母音で終る。子音は k・s・t・n・p・f・m・ŋ・v・r……で、g・d・b・dz は一般に用いない。つまり濁音が語頭に立つことはほとんどないし、r と l との区別がない」(一〇〇頁)。「これらの特徴は、多少の相違はあるが、あたかも古代日本語の音韻の特徴を記述しているかの観がある」(一〇〇頁)。

著者にとつては古代日本語が八つの母音を持っていたことや、その際立った特徴である語幹内の母音調和というような現象はあまり問題でないらしい。ポリネシア語が開音節のみをもつ点が古代日本語と合致する点とあげられているが、泉井久之助さんの次のことはからポリネシア語のこうした状態が本来のものであるかどうか疑われる。「南島諸語の語詞構造は原則として二音節的である。語末には開閉両様の音節がある。すなわち(C)+V+C+V+(C)」(The form of the Austronesian words is generally of dissyllabic type(C)+V+C+V+(C), of which C and V represent respectively a consonant and a vowel: the first and the last C may be missing)(泉井久之助、日本語と南島諸語、民族学研究、第十七卷第二号、一五一—一六頁)。また泉井さんがマレー・ポリネシア基本語に対して*blah「切片、こけら」、*duntu「ぶさぶさ」のように「濁音」で始まる語形をあげているところから見ると、「濁音が語頭に立つことはほとんどない」と大野さんの言うポリネシア語の状態も、派生的ではないかと疑われる。

またポリネシア語において「目まをマタ(mata)、口くをグツ(gutu) (「濁音が語頭に立つことはほとんどない」とのべられているところを見ると、グツというポリネシア語は例外的な語か：引用者)、背せをツア(tua) (ポリネシア語は「uo・uiなどの二重母音は全然許容しない」とのべられてあるところを見ると tua の ua は二重母音ではないらしい…引用者)、胸ちち(乳チチ)をスス(susu)、胃い(腸わた)をプタ(puta) というように、基本的な人体語の中に、日本語と類似する単語があり、「ポリネシア語と同系に属すると考えられ

ているインドネシア語の中には、なお、腹はらをペルト(perut)、臍はらをプサト(pusat)、頬ほをピビ(pipi) というなど、多くの類似する人体語がある」(一〇一頁)という。前掲のポリネシア単語は日本語と類似していると大野さんは述べているが、全く類似していないとも言える。「マライーポリネシア語族の多くの言語の口の祖形は *pʷtʷu と推定されている。これはあまりにも日本語と一致する形であるが、アルタイ系にはこれと類似の形はないようである」(一九二頁)とのべられている。しかるに泉井久之助さんによると、マレー・ポリネシア語の *p は日本語の p に対応し、このことは日本語のノド(喉)と比較すべきものであろうという。尤も、ノドはもともとノムトなら、ノドとの比較は撤回さるべきであるという(泉井、前掲、一八頁)。

類似すると思われる単語が言語系統の決定のデータとしてみなされ得ることを主張しようとするなら、比較例をもっと沢山だして、音対応法則を見出さなければならぬ。その上、ポリネシア語もそれに属すると見られるマレー・ポリネシア語族の他の言語ともてらして右の対応法則を検討して見る必要がある。この手続が取られなければならない。大野さんも自信をもって、*pʷtʷu (大野さんによるとポリネシア語の gutu) が日本語の口と同源であると主張できない筈であるし、またわれわれは大野さんのあげるポリネシア語と日本語との類似身体名のどの一つをも同源のものとして承認できないのである。

そこで、現在のポリネシア語の音韻諸特徴と奈良時代の日本語のそれとの部分的合致や、両語における幾つかの身体部分名称の「類似」をもとにして、ポリネシア語に類した一言語が、日本の

縄文式文化時代に行われていた言語であり、この言語が日本語の成立に対して、フランスの先住民ケルト人（ゴール人）の言語がフランス語の成立に対して果したような役割（ついでながら、この役割については高く見る学者もあり、無視する学者もいる）を果さなかつたらうかという推定に（二〇一頁）われわれは大して学的価値を附与することはできない。要するに日本語のポリネシア的サブストレイトム説は大野さんによって全く証明されていない。

さて、今から約二千三百年前に彌生式文化が始まる。これは大野さんによってその担当者である長身族（南朝鮮人）が南朝鮮からもたらしたものとされる。彼らは、比較的少人数だったので先住種族の中に間もなく拡散して消えてしまう（一三〇頁）。彼らが一体どういふ言語を用いていたか、この点について大野さんの説明ははっきりしていない。揚子江下流域域にいた「南方的色彩濃厚な民族」が南朝鮮へ稲作を運び、「稲作文化は、南朝鮮で何百年かをすごす間に、政治的には北方のツングースに支配され、北方ツングース系の文化との複合体を、そこで形づくった」（一三四頁）。そこで、南朝鮮に移り住んだ南方的色彩濃厚な民族と、彼らを支配するに至った北方ツングース族との接触から生れた種族の言語が南朝鮮語らしく思われる。そして「朝鮮南部の言語——文法的にはアルタイ系の一派で、かつ母音調和をもっていた」（一八八頁）とのべられているところを見ると、北方ツングースは政治的にはもとより、言語的にも勝利したと見られているようだ。しかるに、朝鮮南部言語とツングース語との関連を実際に証明しようとする試みは余り行われていないのは物足りない。

ところで、朝鮮南部の言語は、いわゆる朝鮮語とどのような関係に立っているのか。それについても述べられていないが、「日本語と朝鮮語とは、もし同系であるとしても、密接な関係を生じたのは彌生式時代の開始された年代、すなわち西暦紀元前三百年今から二千三百年前のことであろうと思われる。そのときに朝鮮語から日本語が分離をはじめたとすれば……」（一七五頁）とのべられており、また後に十月二十九日の毎日新聞（九州版）に発表された大野さんの書いた「日本語起源『七つの疑問』に答える」の中で、「……私は『日本語の起源』の中で、日本語と朝鮮語との同系説の証拠になるような単語についての新しい研究を示し、日本語と朝鮮語との同系説を強化することにとめた」とのべられているところを見ると、「朝鮮南部の言語」は、いわゆる朝鮮語と同一視されているとも解し得るようである。

さて、この「新しい言語は、金属器と、稲の農業と、機械という、新しい文化とともに西日本に広まってきた」（一八八頁）。「彌生式時代には、単に、金属器・稲作・機械が技術としてだけ渡ってきたのではなく、それ相当の人を伴っていた。だからこそ、短い時間に九州から近畿までの新しい文化圏を作り上げ、同時にアルタイ系の文法組織と、母音調和とを広め、北方アルタイ系の語彙をも持ちこんだ」（一八九頁）。ただ「アルタイ系の言語を話す人々の数は、それ以前に日本に住んでいた人々より少なかった。そして、後から続く人も絶えてしまった。それ故に、単語の上では、すべてをアルタイ系化することがなく、以前の言語つまり南方系の言語の単語を残したのである」（一九〇頁）。

日本語のポリネシア的サブストレイトムに関する大野説に対す

ると同じく、この見解に対しても疑いがわいてくる。まず第一に新渡来者（南朝鮮人）が、たとえ文化的に非常に優れていたからと言って、数的に先住民族に比して「遙かに少なかった」（一二八頁引用の人類学者金岡丈夫さんの説）状態にあって、しかも後続部隊のない条件のもとで、先住民族語を征服してしまうことが可能であつたらうか。奈良時代の言語に南方語要素は可成り多く残存していた筈ではなからうか。しかるに古代日本語においてポリネシア語と関連ありと断定できることばがどのくらいあるというのか。第二に、日本語が朝鮮語から分離したのが今から二千三百年前とすれば、奈良時代の日本語は分離後わず約一千年を経過したにすぎない。現在のスラヴ諸語は分離してから約千数百年と見られるが、相互理解が困難でない。東トルケスタンのトルコ語とアナトリアのそれは分離後、少くとも千年を経過していると見られるが、東京在住のヤルカンド生れのウイグル・トルコ人はイスタンブルのトルコ語を非常によくわかると私に話した。沿バルト・フィン諸語の分離は紀元前第一千年代に始まったが、相互理解は今も可能という（ハクリネン「フィン語の発達と構造、ロシア訳に対するアリスト教授の註」参照）。このような状態から推せば、奈良時代の日本人は朝鮮語を解し得たことになりそうであるが、私にはそのようなことがあり得たとは思われない。現在でも朝鮮語と日本語とは分離後わず二千三百年しか経過していないとすれば、共通文法形態、共通基本語彙がもっともっと多く見出さるべき筈ではなからうか。ついでながら、比較言語学は、それぞれの語族の諸語の分離の時期を、以前よりずっと古い時代に置く傾向があるようである。例えばブルガリアの言語学者ゲオ

ルギエフは紀元前第五千年代に印欧諸語が既に分離していたらうという説を出した。またフィン・ウゴル諸語の分離はフィンランドの学者によれば紀元前第三千年代中葉（今から約四五百年前）であるが、アリストはそれより数千年前であると述べ、またウラル基本語からサモエード語が分離した時期をフィンランドの学者は、紀元前第四千年代と見るのに対し、アリストはそれより遙か以前と見ている（前掲書二九二頁）。

大野さんの努力にも拘らず、朝鮮語と日本語との差は（もし両者が同源だとして）、二千三百年前に分離し始めたと思えるには余りに大きいから、この点からも大野説は疑をまねく。

かくて、大野さんの日本語起源観は我々を納得させるに充分でないと結論される。

「日本語の起源」の中で、最も重要と思われるのは、日鮮比較語彙であろう。南方語と日本語との関係などは大野さん自身も大して重きをおいていないのではなからうか。右語彙は研究者たちにとって大層有益であろう。私は朝鮮語の専門家ではないからこれら資料及び「音則」について批評することは避けなければならぬ。この点、専門家の立ち入った評価があると思う。ただ日本書紀に出てくる朝鮮河名のナレを日本語として取扱ひ朝鮮語に「河」と比較し、「音則(3)エの脱落する例」（一七九頁）としてあげているなど、正しいであろうか。ナレは朝鮮語音韻史の材料として利用できるが、日・鮮語比較資料には利用できない。本書中の日鮮比較語彙は大部分アルタイ的である筈だから、大野さんがアルタイ諸語との比較を行うことが要望される。

次に副次的な幾つかの問題についてのべて見たい。

大野さんは日本語が代名詞においてコレ・ソレ・アレの区別をすることを重視し、「話し手から近いところの順にコ・ソ・ア・ドの四つの段階を持つ。こういう組織は朝鮮語にはある。しかし、ツングース語・蒙古語・アイヌ語などには、中称と遠称の区別がない」(一〇四頁)のに、「母音の交替か、アクセントの相違があるいは別の音を用いることによって、近・中・遠の代名詞の区別を示すのが、モン語・クメール語・タイ語・安南語などの特徴である。日本語の代名詞の組織が、これらの言語の代名詞の組織と一致しているのは偶然であろうか」(一〇四頁)と説いている。

コ・ソ・ア・ドの下(不定称)は特に問題とならないから、コ・ソ・アの三段階区別が問題となる。これは、なるほどツングース語、蒙古語にはないが、アイヌ説に存在することは金田一、知里「アイヌ語法概説」(一九三六年)五八頁にのべてあるところから明らかである(下表参照)。

またアルタイ系言語のうちで、トルコ語はこの区別をもっている(下表参照)。

トルコ語のju「それ」ということは、トルコ語の古い記録、エニセイ碑文にてでくる。ついでながらソ連のトルコ学の権威バスカコフは一人称、二人称代名詞とbu「これ」、ju「それ」との関連を考え、「人称代名詞は起源上、指示代名詞から直接派生したのではないとしても、少くとも、人称代名詞は、指示代名詞……の発達の一般過程と直接に関連している」という意見を出しているという。(コノノフ「現代トルコ文語文法、モスクワ一九五六年、一七四頁による)。(尤もフィンランドのトルコ学者レセネンは「トルコ語音韻史資料」の中で、juはjの前に或る母音が先行

	アイヌ語 指示代名詞	形容詞	指示形容詞
(近称)	te ここ	(ta-án) > tan	この ta-n-ókai これらの
(中称)	ta そこ	(tá-an (tá-okai	その それらの)
(遠称)	to あそこ	to-án to-n-ókai	あの あれらの
		トルコ語	
	bu これ、この	(ben 私, bi-z 私たち)	
	ju それ、その	(sen 汝, si-z 汝たち)	
	o あれ、あの		

していたのではないかという説を出している。)アルタイ基本語に對して「汝」を表わす語として*siが推定されるが、古代日本語のシが或る場合には「汝」と解され、他の場合には「其」と解されるのは興味がある。

コ・ソ・アの三段階区別が、アイヌ語にも、トルコ語にも、朝鮮語にもあるとすれば、しいてモン・クメール語の影響によって生じたと推定しなくてもよいと思う。かつて、ソ連のコシキンという学者はツングース語の一人称代名詞複数の両形、すなわち「汝」をふくむ「我々」と、「汝」をふくまない「我々」(mitiとgic)をオセアニア諸語と比較したが、古い蒙古語や現代蒙古諸方言でもこの区別が見られることから、ポッペはコシキンの比較を

排し、むしろアルタイ的と指摘したことがある(ポツペ、ダグール方言、一四六頁)。

次にアルタイ語の共通の点としてあげられている諸点(一四〇—一四二頁)にも問題がある(①⑦などの番号は「日本語の起源」のもの)。

(1)名詞の単数・複数の区別はアルタイ語では嚴重でなく、単数が複数か区別して表現することは「一般にアルタイ語では行われない」と述べられているが、トルコ語はもちろん、モンゴル語でも古い記録ほど単・複の区別が割合嚴重である。私が解説した最古のモンゴル語記録、いわゆるチンギス汗碑文には *gurban jagud gucin tabun aldas* 「三百三十五ひろ」ということばがあるが、*jagud* は *jagun* 「百」の複数、*aldas* は *alda* 「尋」の複数である。アルタイ系諸言語では複数接辞が非常に多い。ついでながらこの方面の最もまとまった研究として N. Poppe, *Plural Suffixes in the Altaiic Languages. Ural-Altaiische Jahrbücher. Bd XXIV, Heft 3-4, 1952* をあげることができよう。

(7)「アルタイ語の動詞の基本形はそのまま名詞に用いられる。またそのまま命令形に用いられることが多い」。アルタイ系言語で動詞の基本形(システム)がそのまま命令形に用いられるというのは正しいが、そのまま名詞に用いられるというのは正しくない。一般には動詞幹(これは命令形として表われる)に様々な接辞がついて名詞が形成される。たとえば、モンゴル語では、動詞派生名詞形成接辞に次のようなものがある。

(ポツペ、文語蒙古語文法、ウイスバーデン一九五四年、四四頁以下による。)

—ri	—l	—buri
—sun	—lang	—ca
—si	—lgal	—dal
	—li	—dasun
	—lta	—dun
	—m	—g
	—ma	—gaci
	—mi	—gan
	—mji	—gasun
	—msar	—gul
	—mta	—gur
	—ng	—guri
	—nggui	—kulang
	—r	—ja

古代トルコ語においては、かゝる接辞として次のようなものがある。

—yak	—m	—a
—yuk	—ma	—d
—z	—mak	—duk
	—maz	—g
	—mif	—g°c
	—m°r	—g°k
	—°n	—gli
	—nc	—gma
	—p	—g°n
	—r	—gu
	—sik	—guci
	—f	—gul
	—°t	—k
	—taci	—l

(ガバイン、古代トルコ語文法、ライプチヒ一九五〇年、七〇頁以下による。)。は母音を示す。)

日本語の連用形(例えば「行き」は動詞の基本形とみなされているが、連用形は基本形(システム)ではなく、システムに*i*という動詞派生名詞形成要素が接尾した形であって、日本語の連用形はアルタイ系諸語の、命令形と同形なる動詞基本形とは異なることを指摘しておきたい(*i*という要素が、アルタイ諸語において見られる非生産的な接辞*i*と比較されるべきことは、前記連合大会で発表された「アルタイ比較言語学から見た日本語動詞」の中で私は

のべておいた。)

(8) アルタイ語には印欧語のような受身の表現はなく、動詞の後に「アル」とい語をつけて表わすことが多いとのべられ、日本語の「殺サル」「投ゲラル」という形がアルと古い関係があるのではないかと推定されている。「インド・ヨーロッパ語のような受身の表現」とはどういうことか、はつきりしない。例えば、ラテ

受身の接尾辞 「有ル」を表わす動詞

モンゴル語

- gda—gde a—
- ala— 殺す bui
- ala—gda—ba 殺された bayi—
- bari— 捕える
- bari—gda—ba 捕えられた
- üje— 見る
- üje—gde—be 見られた bü—
- da—de
- ol— 見つかる
- ol—da—ba 見つけられた
- ta (b,s,d,g,r の後)
- ab— 取る
- ab—ta—ba 取られた
- ög— 与える
- ög—te—be 与えられた

古代トルコ語

- il—ül—ül—ul är—
- bol—

- kat— 交ぜる
- kat—il—mif 交ぜられた
- ört— 蔽う
- ört—ül—mif 蔽われた

現代トルコ語

- yaz— 書く
- yaz—il—dī 書かれた

満洲語

- bu bi
- wa— 殺す
- wa—bu—ha 殺された

ツングース語

- v bi
- va— 殺す
- va—v—rin 殺された (彼)

ン語、ドイツ語、英語、ロシア語では受身の表わし方がそれぞれちがっていて、われわれは印欧系諸語の受身の総括的概念をつくり上げることができない。この点は問題としないうとしてアルタイ系諸語における受身形と「有ル」との間には少くともトルコ、モンゴル語には関連がないことは、次の資料の示す通りである。

満洲語の受身形接尾辞 bu 及びツングース語の -v が bi の派生形であるとは断定できず、アルタイ系の諸言語では受身形が「有ル」という動詞によってつくられるという説は実証されない。少くと

もモンゴル語、トルコ語については大野さんの説は正しくない。(9) アルタイ系諸言語においては「動詞の使役形を作るのに『為』という動詞から転じた語を、動詞の後につけて表わすことが

次に、母音調和の消滅をポリネシア語的影響によって説明することについて一言したい。
古代日本語の語幹に見られる母音調和は大野さんによるとアル

	使役の接尾辞	「為ル」を表わす動詞
モンゴル語	—gul oro— 入る üje— 見る ide— 食べる (尚お -l, -lga もあり。)	ki— oro—gul—ba 入らせた üje—gül—be 見せた ide—gül—be 食べさせた
古代トルコ語	—t okī— 読む kücā— 強くある —tur~dur yi— 食べる	kīl— okī—t—mīš 読ませた kücā— t —mīš 強めた —tur~dur yi—dür—mīš 食べさせた (満洲語には「為ル」を表わす動詞がない)
満洲語	—bu tuwa— 見る	tuwa—bu—xa 見せた
ツングース語	—w jawa— 捕える	ō— jawa—w—kān—> jawūxān つかまえさせる

多い。(日本語でも「殺サス」「投ゲサス」などの用法があり、このス・サスは「為」と古い関係のある言葉らしい)という点も正しいとは言えない。左にアルタイ系諸語の使役形と「為ル」という意味をもつ動詞をかかげて見る。

タイ的である。即ち、北方ツングースによって、朝鮮南部について西日本にはこばれたものである。そして「多くの縄文式文化の人々は、たやすく新しい言語の発音の体系に切りかえることができなかっただらう」(一九四頁)が、「母音調和の存在しない基層言語のうへへでも、母音調和を持つ言語は十分広がり得る」(十月二十九日「毎日」に発表された前記論説)という。これによれば、母音調和のないポリネシア語類似言語を話していた縄文式文化人も、彌生式文化が始まってから母音調和のある言語を使用するに至ったらしく、その名残は八世紀まで続いたわけである。ところで母音調和は日本で九世紀に消え去るのであるが、この消滅の原因について、「おそらく、母音調和という発音上の習慣を本来もっていなかった多勢の人々の上へ、アルタイ語が広まって来たから、発音のアルタイ的傾向は次第に弱まり、年月がたつうちに、それが薄れて来たのではなからうか。ポリネシア語には、前舌後舌の対立による母音調和は存在しないのである」(一九七頁)と述べられている。つまり母音調和を消滅させたのはポリネシアの発音傾向ということである。しかし、大野さんによれば、ポリネシアの基層語の上に「母音調和を持つ言語」が広がったと見られ、つまり基層が母音調和を採用しこの点でアルタイ的発音習慣をとり入れたと見られるのであるから、母音調和の消滅を基層の発音傾向によって説明しようとすることは、納得が行かない。ブルームフィールドの言うように、基層説は、第二言語として或る言語をうけ取った人々によってその言語が話される当時における変化を説明することができるのみで、後世の変化までを基層の影響に帰するのは科学的であるまい。(ブルームフィールド、ランゲージ、ロンドン一九三五年、三八六頁参照)。

最後に大野さんの日本語四母音説にふれておきたい。

「ポリネシア語族の古い母音体系は、a・u・ə・iの四つの母音によって成り立っていたらしいが、私の研究によると、日本語の母音組織も、奈良時代を古くさかのぼった時代には、母音組織が八つから減ってしまつて、a・u・ə・iの四つであつたのではないかと思われるふしがある」(一九五頁)と書かれている。(奈良時代の乙類オ列母音は*əにさかのぼるものと解されているようである。乙類ケヘメ母音と混同せざること)。

「奈良時代を古くさかのぼった時代」とは大野さんの言説から推定すれば、縄文時代、即ち今から二千三百年前より以前の時代のことであろう。なぜなら、彌生式文化の到来とともにアルタイ系の、前記四母音より多くの母音をもつ朝鮮南部言語が支配するにいたり、南島系原住民の言語の上にもそれが広がったから。縄文時代の言語がa・u・ə・iの四つであり、ポリネシア語族の古い母音体系も同じ四母音から成つていたとすれば、ポリネシアの基層説にとつて非常に有力な論拠が見出されたことになる。

ところで「日本語の起源」では四母音説の根拠は示されず、「国語と国文学」一九五三年六月号発表の「日本語動詞の起源について」を参照するよう示されているだけである。さてこの論文の五、五六頁にはə(乙類ケヘメ母音)は下二段活用の未然形に現われ*əにさかのぼること、i(乙類キヒミ母音)は上二段活用の連用形に現われる*īか*īにさかのぼること、e(甲類ケヘメ母音)は四段活用命令形に表われ*ēにさかのぼることから、ə, i, eが「変化の結果現われて来ることはあつても基本的、本来的な母音として活動していない」点が注目され、また「i, e, əの母音を含む音節が二つ以上結合して語根を構成

する例が無い」点も注目され、そこから、これら母音は「本来的な母音でなく転成した母音」であると思われること、次に*əもまた、*əをふくむ音節が二つ以上結合して形成された語は少数存在するが、^{母音}ə、^{母音}ī、^{母音}e、^{母音}o(擬音語)などのreduplicationのみであるから、*əも「本来的な母音ではなかつたのであらう」と推定され、「本来的には日本語の母音は後舌a、u、中舌ə、前舌iという構造を有していたのではあるまいかという臆測が導かれて来る」と結論される。

これは一見注目すべき見解であるが、^{母音}a+^{母音}e+^{母音}i+^{母音}e+^{母音}o(前掲五〇頁)のみと決めてかかっているので、当然動詞活用の「起源に関する母音」にe, ə, iが出て来ないのである。しかるにこの前提自体が何ら証明されていないのである。凡ての*əが*īに、凡ての*eが*ēに、凡ての*iが*īにさかのぼることを誰が保証しているのであらうか。

oの本性を疑わせる理由として挙げられていることは全然問題とならない。蒙古語、トルコ語では本来、第一音節以外にoは現われない。つまり、*əをふくむ音節が二つ続くことは出来ないがこのことからoの本性を疑つた学者は恐らくないであらう。私は*ə, i, eの一部はたしかに派生的であると考えるが、全部が派生的とは考えない。

* * *

「日本語の起源」はアンビシヤスな劣作ではあるが、その中で学問的に確実に論証されているものが非常に少ないのは、言語学者、国語学者を失望させる。ただ前述のように、日鮮比較彙彙をかなり多く集められた点は高く評価されるべきであらう。